日本体育大学紀要 36 巻 1 号 (2006) 1-18

[原　著]

幕末～明治初期における日本人の歩行の特徴について

—訪日外国人の見聞録を手掛りとして—

谷 釜 尋 徳*

(2006 年 5 月 8 日受付，2006 年 6 月 29 日受理)

Characteristics of Japanese Walking Styles in the Period from the End of the Tokugawa Shogunate (Edo Era) to the Beginning of the Meiji Era

—Using as Source Data Observational Records of Foreigners Visiting Japan—

Hironori TANIGAMA

The present research, using as its chief source records of observations witnessed by foreigners visiting Japan in the late Tokugawa Shogunate period (Edo Era) to the beginning years of the Meiji Era, presents an investigation of the forms of Japanese walking styles as viewed by these foreign persons.

A summary of the chief results of the present study are as presented below.

1. Within research hitherto, although the majority opinion reported therein is that the old style of Japanese walking was the "*nanba*" style (whereby the arm and the leg of one body side are moved in unison while walking, instead of alternatively with the opposite foot or arm), one must conclude that such is not an opinion that has already been clarified via detailed research of historical records, but is rather one existing in a stage where it has yet to be fully validated. However, as an opinion that is shared in common by all researchers, it has been confirmed that Japanese walking style in the pre-modern era was different in kind to that of today.

2. In research of observational records by foreigners, extracted were items of shuffling of feet (*suri-ashi*), sounds made while walking, walking on tiptoe (*tsumasaki*), forward-inclined posture, walking with short, quick steps (*komata*) and walking "pigeon-toed" (*uchimata*), and "odd" or "queer" walking style. Of these, shuffling of feet (*suri-ashi*), sounds made while walking, walking on tiptoe (*tsumasaki*), and "odd" walking style occurred while strongly effected by the footwear with wobbly heels (*zori*, or Japanese sandals, and *geta*, or wooden clogs) worn in daily life in Japan. Meanwhile, it was women who were chiefly observed walking with short, quick steps (*komata*) and walking "pigeon-toed" (*uchimata*), and it was pointed out that especially walking with short, quick steps (*komata*) is a characteristic that is an inevitable consequence of the effects of wearing the Japanese kimono, which restricts movement.

3. Japanese movements, including walking, were greatly restricted by the clothing and footwear used in ordinary, daily life. In these terms, it was also confirmed that foreign persons who themselves actually wore Japanese clothing and/or footwear felt "difficulty in moving," while Japanese persons who wore Western-style clothing felt

* 大学院博士後期課程・スポーツ文化・社会科学系

"ease in moving." Nevertheless, from time to time, efforts were made to mitigate the restrictions occurring with Japanese wear: travelers would roll up the bottom (hem) portion of the kimono, as this portion hindered movement, and would set out for walks of long distance not wearing *zori*, but instead *waraji*, another type of straw sandal in which the foot is fixed on a type of pedestal (heel). As a result, it is thought that travelers were able to walk with longer strides (*omata*) than usual.

4. Although there were foreigners who indicated that, as habits concerning walking of Japanese within the early Meiji period, there was an absence of rhythmical and reflex movements, considering the state of diffusion of Western-style clothing at that time, such habits, too, are considered to have been caused by Japanese-style clothing and footwear. Further, although there was no recording of the "*nanba*" walking style within the observational records of foreigners, such cannot be considered to be a direct denial of the existence of the "*nanba*" walking style; rather, this is an issue that surely requires even further investigation into the future.

Key words: The period from the end of the Tokugawa Shogunate to the beginning of the Meiji era, Walking, Foreigners visiting Japan, Observational records

キーワード: 幕末～明治初期，歩行，訪日外国人，見聞録

1. 問題の所在

地域や民族・文化を問わず生まれ持った人体の基本構造はすべての人々に共通するといわれている[1]。しかし，その生物学的所与性の許容する範囲内において人間はさまざまな運動を行うことが可能であるがゆえに，日常的な動作一つ取ってみても各々の時代・地域・民族・文化などによって必ずしも同一の様態をもって行われるとは限らない。生活に極めて密着した運動としての「歩行」についても同様である。

そのため，西洋化（＝近代化）する以前の日本においては，人々の歩行の様態は今日の日本人とは多少異なっていたと考えられる。それでは，かつての日本人はどのように歩いていたのであろうか。近年，この問いに対する注目が集まり数多くの研究成果が報告されてきた。しかし，従前の諸研究において，必ずしも日本古来の歩行が史料に基づいて明確に示されてきたとは言い難い。

この種の研究の進展を阻んできた要因の一つとして，史料の問題が指摘されよう。当時の歩行に関して日本人の手によって記された史料が絶対的に不足しているからである。おそらく，「歩行」という余りにも当然の動作について，当時の日本人が意識的に記録することは少なかったためであろう。

しかし，当の日本人にとっては自覚するに足らないことであっても，異文化の民たる外国人の目には，その歩行は記録に値する風変わりなものとして映ったようである。事実，幕末～明治初期において多く来日した外国人，とりわけヨーロッパ人の見聞録を紐解いてみると，彼らは西洋化以前の日本人の生活実態を自国文化との比較においてつぶさに観察しており，そこには歩行に関する記述も見受けられる[2]。このようにとらえかえしてみるとき，外国人の目に映った日本人の歩行に関する記述を蒐集することによって，前述の史料的な限界をある程度解消できるばかりか，当該の課題にある種客観的な側面から迫りうることが明確になってくる[3]。そこで本研究では，幕末～明治初期において訪日外国人が認めた見聞録を主たる手掛かりとして，彼らの目線がとらえた日本人の歩行の様態について検討していくことにしたい[4]。

無論，この手の文献がこれまで全く顧みられなかったわけではない。例えば，三浦雅士[5]，野村雅一[6]，中房敏朗[7]などが訪日外国人の見聞録を史料として用いている点は注目されてよい。しかしながら，彼らの論稿において部分的に取り上げた外国人の見聞録はわずか数点でしかなく，量的にみてもその検討は希薄であるといわねばならない。

当該史料が関連の諸研究においてこれまで積極的に活用されてこなかった理由の一つは，この種の史

料に内在する問題点に求めることができる。幕末〜明治初期に来日した外国人の見聞録の中には，異文化の発見を通じて自らの属する西洋文明の優位性を改めて自覚したがために[8]，記述の端々に強固な優越感が感じられるものも少なくない。したがって，この手の見聞録には多少の誇張表現がなされている可能性もあり，その意味で主観的な要素が多分に含まれていることは否定すべくもない。そこで，より客観的な分析をするために，本研究は幕末〜明治初期に来日した外国人の見聞録を可能な限り蒐集することにした。そこに記されている歩行に関する記述を量的に把握し，そこから一定の傾向を導き出すことができれば，ある程度の客観性を持った史実が明らかになると考えたからである。

ただし，上記の視点に基づいて蒐集した見聞録の著者が歩行に関する見聞を記述するために対象としたのは，当時人口の大半を占めた農村に在住の人々よりも，むしろ長崎をはじめ江戸（東京）や横浜などのいわゆる「都市」に生活する人々であった[9]。したがって，本研究では幕末〜明治初期における日本人の中でも，とりわけ都市の人々を取り上げるものである[10]。また，男女の別はともかく，見聞の対象とした人の身分や生業にまで及んで記録した外国人はまれであるので，本研究ではその点について考慮されていないこともあらかじめ断っておきたい。

2. 従前の研究史の概観

外国人の見聞録より日本人の歩行の様態を検討する作業に先立って，ここでは近代以前における日本人の歩行に関する従前の研究史を概観しておきたい。かつての日本人は「ナンバ」の姿勢で歩いていたというのが，現在のところ通説になっている感がある。今日の日本人が歩行する際，右足が出ると左手が前に出るという体を捻った姿勢の連続が通常であるが，ナンバの歩行は同側上下肢が同時に出る歩行で，右手と右足，左手と左足が同時に出るものであるという[11]。

この分野の研究者であり第一人者として知られる演劇評論家の武智鉄二は，ナンバの歩行を次のように説明している[12]。

「日本民族のような純粋な農耕民族（牧畜を兼ねていない）の労働は，つねに単え身でなされるから，したがってその歩行のときにもその基本姿勢（生産の身ぶり）を崩さず，右足が前へ出るときには，右肩が前へ出，極端に言えば右半身全部が前へ出るのである。しかし，このような歩行は，全身が左右交互にむだにゆれて，むだなエネルギーを浪費することになるので，生産労働の建て前上好ましくない。そこで腰を入れて，腰から下だけが前進するようにし，上体はただ腰の上に乗っかって，いわば運搬されるような形になる。（中略）だから，ナンバ歩きに，手を振るという説明は，正しくない。農民は本来手を振らない。手を振ること自体無駄なエネルギーのロスであるし，また手を振って反動を利用する必要が，農耕生産にはない。」

このように，武智鉄二はナンバの歩行を農耕生産における半身の姿勢と結びつけて理解しているのである[13]。

武智はナンバについて記す数多くの著作の中で，主として農民層に着目してその生産と歩行の関係を論じてきた。それは，武智が農民芸術としての舞や能などの所作事を検討のための手掛かりとしてきたことや，近代以前において農民が人口の大半を占めていた事実とも関係があろう。とりわけ後者については，武智が農民を指して「日本民族の九〇％以上はナンバの姿勢で日常生活をしていた」[14] と指摘し，三島由紀夫との対談においても大部分の常民の生活実態を把握することの重要性を訴える発言をしていることからもうかがえよう[15]。

しかし，武智の歩行に関する検討は農民層にのみとどまっているわけではなく，近世において都市に居住した人々の歩行にも及んでいる。都市の消費生活の中では，江戸中期以降の一般的生産指数の低下およびそのことに起因する慢性的不況の中で，節約が最高の美徳とされた。そこから，筋肉エネルギーのロスを少なくするための動きや生活上の工夫が積み重なり，手を振って反動を利用することこそなかったものの，手と足の左右交替の動き，すなわち「非ナンバ」の形態が都市では普遍化したという[16]。

武智はこうした日本古来の歩行が，手を前後に振って反動をとり手足の左右交替の動きで前進する今日的な歩行へと変化した直接的な要因を，明治期において義務教育の中に採用された兵式体操に求めている[17]。以上概観してきたような武智鉄二の「ナンバ」に関する一連の見解は，今やこの分野におい

て大勢を占めているように思える。

このナンバについては，すでにバレエ評論家の蘆原英了によって取り上げられている[18]。氏は1941年に発表された「ナンバン」という論文において，ナンバの姿勢はスポーツや舞楽，歌舞伎にもみられるということを指摘し，これを通常よりも力を求める姿勢として結論づけた[19]。しかしながら，蘆原の論稿においては，かつての日本人が武智の提示するようなナンバ歩行であったかどうかまでの検討には至っていない。

武智以降にナンバの歩行について言及した主な研究者としては，歴史家の多田道太郎，次いで民俗学者の高取正男があげられる。多田は伝統演劇にみられる「すり足」について論じる際，基本的生産の姿勢がそのまま歩行のありかたに移しかえられたという武智のナンバの説明を「みごとに成功している」[20]と賞賛し，基本的には武智のナンバ論に異論を唱えていない。しかし，伝統演劇におけるすり足の採用に関しては，「人間の行動様式（しぐさもふくめて）は，労働の観点からのみ，説明しつくされるものではない」[21]と指摘する。それでも，労働の基本姿勢の日常化が「ナンバ」，宗教の基本姿勢の日常化が「すり足」なのではないかと推論しており，結局のところ武智の説に賛同する立場をとっているのである[22]。

高取正男はナンバの半身の姿勢を，天秤棒を担ぐ姿勢を引き合いに出して説明する。高取によれば，天秤棒を使うコツは，「右で担ぐときは右肩を前に出して半身にかまえる。左足で地面を蹴って右足を前に踏みだすとき，左手を後に振ってはずみをつけ，右腰，右肩，右手を前に押しだし，このほうに力をいれて」[23]半身のまま進むのがよいという。これは天秤棒を担ぎながらの歩行であり通常の歩行とは異なるが，半身の姿勢という点ではいわゆる「ナンバ」的な要素をみることができよう。ともあれ，高取も武智の見解に触れたうえで「半身のかまえは，われわれ日本人にとって，本来はもっとも自然で，基本的な働く姿勢であった」[24]とし，広い意味でナンバが労働に由来することを指摘した。

以後も武智のナンバ論は多くの研究者によって引継がれることになる。人類学者の野村雅一は，かつての日本人の歩行を次のように説明する[25]。

「日本の民衆の伝統的姿勢―この場合，主として明治期まで人口の大多数を占めていた農民を問題にしている―は，腰をかがめ，あごをつきだし，四肢がおりまがった姿であった。歩くときもひざはまがったままであり，腕の反動も利用することはない。なまじ腕をふって歩くように言うと，右腕と右脚，左腕と左脚というように，左右の手と足をそろえてつきだす，いわゆる『ナンバ』式で歩きだすのである。」

上記の引用からも判断しうるように，野村も基本的には武智の見解を踏襲している。しかしながら，ナンバの理論づけに関しては，多種にわたる田下駄の存在を根拠として，「日本の農民にとっては，腰をかがめ，ひざを曲げて，大地を踏みしめて歩くことが，しばしば，すなわち労働であった」[26]と指摘し，武智の論をさらに進める見解を示した。

また，野村はナンバを日本独特の姿勢とはせず，「ナンバはどうも世界に相当ひろく分布する姿勢であって，むしろ西洋人のように脚と腕を左右反対に動かして，反動を利用しながら歩くというほうが特殊な歩き方として発達したのではないか」[27]と推論する。加えて，姿勢や動作が衣服の形態によってかなりの程度制約を受けるという指摘も注目すべき観点であろう[28]。

その他，評論家の三浦雅士[29]，武術研究家の甲野善紀[30]，教育学の斎藤　孝[31]，体育・スポーツ史を専門とする野々宮徹[32]や稲垣正浩[33]などの研究においても，武智の理論づけに賛同しているか否かはともかく，近代以前における日本人の歩行がナンバであったことについて異論は唱えられていない。

そのなかにあって，ナンバの起源を労働の姿勢に求める武智の説とは異なる見解を示したのが河野亮仙である。河野は「なんばについてはよく農耕民族である日本人が鋤や鍬を持って田を耕す動作からくるなどと説明されるが，こじつけのように思われる。むしろ，山がちな国に住む民族の歩法との関連から導き出したほうがよいと考えている。」[34]と述べ，日本古来のナンバの歩行が地形に由来すると指摘したのである。

近代以前における日本人の歩行がナンバであったこと自体を疑った研究も皆無ではない。体育・スポーツ史研究に従事する中房敏朗は，近代以前の歩行に関する従前の研究の問題点として，日本人が古来ナンバで歩いていたことを自明の事実であると考

えている点を掲げている。中房は訪日外国人が記した見聞録数点や絵画史料を用いて検討を進めたうえで，当時の日本人が今日と違う歩き方であったことは恐らく間違いないが，その歩行がナンバであったかどうかはいまだ確証が得られていない段階にあると指摘する[35]。

また，木寺英史もかつての日本人が今日とは異なる歩き方をしていたことは認めているものの，それがこれまでに定着した左右の半身を繰り返して前進するナンバの歩行であったことに関しては疑問を呈している[36]。さらに，天野郡壽もナンバは日常の動作ではなかったと理解している[37]。

以上，近代以前における日本人の歩行に関する従前の研究史を概観してきた。それによれば，かつての日本人の歩行がナンバであったという見解が大勢を占めているようである。しかしながら，ナンバの歩行を是認する研究の多くは武智鉄二の見解に依拠するところが大きく，その武智の説にしても決定的な史料に基づいたものであるとは言い難い。だとすれば，中房が言うように，日本古来の歩行がナンバであったかどうかの確証はいまだ得られていないようにも思える。ともあれ，近代以前における日本人の歩行が今日のそれとは異質であったということは，上掲のどの識者にも共通した見解であるといえそうである。

人間の歩行を題材に，精密科学的な運動分析を批判したフランスの文豪バルザックは，「歩きかたは身体の表情である」と述べ，歩き方には各々の職業や生活習慣が映し出されるとしている[38]。この点は岸野雄三や野村雅一によっても言及されており，かつての日本にも身分，職業，性別に特有な姿勢や身振り（歩行を含む）があったという[39]。これは，日常の習慣的な身体動作には社会的・文化的影響が色濃く反映されているという，フランスの社会学者モースの指摘と近似するものである[40]。

こうした指摘を踏まえてみると，かつての日本人の歩行も各々の属する社会の影響を強く受けていたであろうことがうかがえ，そこに何らかの特徴を見いだすことができるといえよう。そこで本研究では，近代以前の日本人がナンバで歩いていたのか否かという点に終止することなく，外国人の目線がとらえた日本人の歩行の特徴を抽出することに努め，さらにその諸特徴がいかなる要因によって生み出されていたのかという点にまで及んで検討していくことにしたい。

3. 幕末～明治初期における日本人の歩行の特徴

ここでは，主に幕末～明治初期に来日した外国人の見聞録を手掛りとして，当時代における日本人の歩行の特徴を探っていきたい。これまでに蒐集し得た見聞録は計147点であるが，表1は当該史料に関する情報を一覧にし，50音順に並べたものである。史料の蒐集にあたっては，現在までに日本語で翻訳および刊行されているものを対象として，可能な限り多くを蒐集するように努めた。ただし，同内容の原書が訳者・出版社・タイトルなどを違えて複数刊行されている場合については，重複を避けるべくそのうちの1点を表に掲載している。

表1に掲載した文献中で日本人の歩行に関して記録しているものは計32点であるが，本研究はそこに記された内容を拠り所として検討を進めていくものである。蒐集した147点の見聞録のうち，日本人の歩行に触れたものが32点であるという事実から推して，全体的な傾向として外国人は日本人の歩行にそれほど興味を示していなかったといわねばならない。

ともあれ，32点の歩行に関する記述に目を向けてみると，著者ないし訳者によって若干の表現の違いこそあれ，その内容からある一定の傾向を導き出すことができる。まず，日本人の歩行の特徴としては，足を引き摺ること（引き摺り足）[41]，歩行の際に音が生じること，爪先歩行，前傾姿勢，小股・内股，歩行が奇妙であること，などが多くの外国人が指摘した主たる項目として浮び上がってくる。また，種々の着物や履物の影響によって歩行が困難あるいは容易になるなどといった歩行の規制についても少なからず観察されている。

こうした傾向を踏まえ，歩行について記された史料を対象として，その史料に関する情報と併せて上記の項目を設定し，来日した年代順に一覧にした表2が作成されている。表2においては，記述の内容が各種の項目に該当するとき，その項目（特徴）に影響を与えている要因も見聞録に併記されている場合はその要因を，そうでない場合には単に○印を記入している。これによって，史料ごとに示される歩行の特徴およびそれに影響を及ぼした要因を，全体

の傾向の中で把握できると考えたからである。

表２によると，外国人が見聞の対象としたのは男性よりも女性の方が若干多い感がうかがえる。対象が男女どちらであるのかが判明しない記述も少なからず見受けられるものの，この傾向に何らかの意味を付与することもできるのではなかろうか。つま

表１　幕末～明治初期における訪日外国人の見聞録一覧

NO	著者	タイトル	国籍	来日した年代	原書刊行年	出版社	出版年
1	アーノルド	ヤポニカ	イギリス	1889	1891	雄松堂出版	2004
2	アームストロング	カラカウア王のニッポン仰天旅行記	アメリカ			小学館	1995
3	アルミニヨン	イタリア使節の幕末見聞記	イタリア	1866	1869	新人物往来社	1987
4	アンベール	幕末日本図絵　上,下	スイス	1863～64	1870	雄松堂出版	1969-70
5	ヴィシェスラフツォフ	ロシア艦隊幕末来訪記	ロシア	1859	1862	新人物往来社	1990
6	ウィリアムズ	ペリー日本遠征随行記	アメリカ	1853,54	1910	雄松堂出版	1970
7	ウイル	ウイル船長回想録	イギリス	1860～	1853～1899	北海道新聞社	1989
8	ヴィルマン	日本滞在記	スウェーデン	1652	1667	雄松堂出版	1970
9	ウェストン	極東の遊歩場	イギリス	1888～95,1902～06,1911～15	1918	山と渓谷社	1970
10	ウェストン	ウェストンの明治見聞記	イギリス	1888～95,1902～06,1911～15		新人物往来社	1987
11	ウェストン	日本アルプスの登山と探検	イギリス	1888～95,1902～06,1911～15	1896	岩波書店	1997
12	ヴェルナー	エルベ号艦長幕末記	ドイツ	1860～62		新人物往来社	1990
13	エルギン	遣日使節録	イギリス	1858		雄松堂出版	1968
14	オイレンブルク	日本遠征記　上,下	ドイツ	1860～61	1864	雄松堂出版	1969
15	オズボーン	日本への航海	イギリス	1858	1859	雄松堂出版	2002
16	オリファント	エルギン卿遣日使節録	イギリス	1858	1859	雄松堂出版	1968
17	オリファント	英国公使館員の維新戦争見聞記	イギリス			校倉書房	1974
18	オールコック	大君の都　上,中,下	イギリス	1859～	1863	岩波書店	1962
19	カヴァリヨン	254日世界一周 (「モンブラン日本見聞記」所収)	フランス	1891	1894	新人物往来社	1987
20	カッテンディーケ	長崎海軍伝習所の日々	オランダ	1857～59	1860	東洋文庫	1964
21	ギメ	1876ボンジュールかながわ	フランス	1876	1878	有隣堂	1977
22	ギメ	東京日光散策	フランス	1876	1880	雄松堂出版	1983
23	ギルデマイスター	ギルデマイスターの手紙	ドイツ	1850頃		有隣堂	1991
24	クライトナー	東洋紀行　1～3	オーストリア	1878頃	1881	東洋文庫	1992
25	クラフト	ボンジュール・ジャポン	フランス	1882		朝日新聞社	1998
26	クラーク	日本滞在記	アメリカ	1876		講談社	1967
27	グリフィス	明治日本体験記	アメリカ	1870～74	1876	東洋文庫	1984
28	グリフィス	ミカド	アメリカ	1870～74	1915	岩波書店	1995
29	クロウ	日本内陸紀行	イギリス	1881	1883	雄松堂出版	1984
30	クローデル	朝日の中の黒い鳥	フランス	1921～25・26～27	1927	講談社	1988
31	ケーベル	ケーベル博士随筆集	ロシア	1893～	1916～23	岩波書店	1928
32	ケンペル	江戸参府旅行日記(「日本誌」の抄訳)	ドイツ	1690～1692	1777～79	東洋文庫	1977
33	ケンペル	日本誌　上下	ドイツ	1690～1692	1777～79	霞ヶ関出版	1989
34	コトー	ボンジュール・ジャポン	フランス	1881	1884	新評論	1992
35	コバルビアス	日本旅行記	メキシコ	1874	1876	雄松堂出版	1983
36	ゴロウニン	日本幽囚記　上,中,下	ロシア	1811～13		岩波書店	1943～46
37	ゴロウニン	日本俘虜実記　上,下	ロシア	1811～13	1816	講談社	1984
38	ゴロウニン	ロシア士官の見た徳川日本	ロシア	1811～13	1816	講談社	1985
39	ゴンチャロフ	日本渡航記	ロシア	1853	1857	雄松堂出版	1969
40	サトウ	一外交官の見た明治維新　上下	イギリス	1862・95	1921	岩波書店	1960
41	サトウ	アーネスト・サトウ公使日記　1，2	イギリス	1862・95	1861～1926	新人物往来社	1989～91
42	サトウ	日本旅行日記　1,2	イギリス	1862・95		東洋文庫	1992
43	サトウ	明治日本旅行案内　上中下	イギリス	1862・95		平凡社	1996
44	サンソム	東京に暮す	イギリス	1928～36		岩波書店	1994
45	シドモア	日本・人力車旅情	アメリカ	1884		有隣堂	1986
46	シドモア	日本紀行	アメリカ	1884		講談社	2002
47	シーボルト	日本　1～6	ドイツ	1823～28・53	1832～51	雄松堂出版	1977～79
48	シーボルト	江戸参府紀行	ドイツ	1823～28・53	1897	東洋文庫	1967
49	シーボルト	ジーボルト最後の日本旅行	ドイツ	1823～28・53	1903	東洋文庫	1981
50	シーボルト	小シーボルト蝦夷見聞記	ドイツ	1823～28・53		東洋文庫	1996
51	シュピース	プロシア日本遠征記	ドイツ			奥川書房	1934
52	シュリーマン	日本中国旅行記	ドイツ	1865	1867	雄松堂出版	1982
53	シュワルツ	薩摩国滞在記	ドイツ			新人物往来社	1984
54	スエンソン	江戸幕末滞在記	デンマーク	1866～67・70	1869～70	新人物往来社	1989
55	スポルディング	日本遠征記	アメリカ	1853,54	1855	雄松堂出版	2002
56	スミス	ゴードン・スミスのニッポン仰天日記	イギリス	1898		小学館	1993
57	スミス	日本における十週間	イギリス	1860	1861	雄松堂出版	2003
58	セーリス	日本渡航記	イギリス	1613～14	1900	雄松堂出版	1970
59	ダヌタン	ベルギー公使夫人の明治日記	ベルギー	1893～1910	1912？	中央公論社	1992
60	チェンバレン	日本事物誌　1,2	イギリス	1873～	1890	東洋文庫	1969

り，外国人にとっては，男性よりも女性の歩行の方が記録に値する特異な動作であったという可能性が示唆されるのである。以下，表２から読み取ることのできる歩行の特徴を項目ごとに検討していくことにしたい。なお，文中において初出の外国人名の後に付した数字は，当該の人物が来日した年代を指し

表１　つづく

61	チェンバレン	明治旅行案内	イギリス	1873〜	1891	新人物往来社	1988
62	ツュンベリー	ツンベルグ日本紀行	スウェーデン	1775〜76	1793	雄松堂出版	1928
63	ツュンベリー	江戸参府随行記	スウェーデン	1775〜76	1793	東洋文庫	1994
64	ティチング	日本風俗図誌	オランダ	1779,1781〜83,84	1822	雄松堂出版	1970
65	デュパール	おはなさんの恋—横浜弁天通り1875年	フランス	1874〜76	1879	有隣堂	1991
66	デュパン	日本—風俗、習慣、風景描写、地理—ヨーロッパ人との関係（「モンブランの日本見聞記」所収）	フランス	1861	1868	新人物往来社	1987
67	トゥアール	フランス艦長の見た堺事件	フランス			新人物往来社	1993
68	ドゥーフ	日本回想録	オランダ	1799〜1817	1833	雄松堂出版	2003
69	ニコライ	ニコライの見た幕末日本	ロシア	1861〜69	1869	講談社	1979
70	ネット—、ワグナー	日本のユーモア	ドイツ	1873〜1885	1900	刀江書院	1971
71	ハイネ	世界周航日本への旅	ドイツ	1853	1856	雄松堂出版	1983
72	バード	日本奥地紀行	イギリス	1878	1880	平凡社	2000
73	バード	日本紀行	イギリス	1878	1880	雄松堂出版	2002
74	パーマー	黎明期の日本からの手紙	イギリス	1885〜	1894	筑摩書房	1982
75	ハラタマ	オランダ人の見た幕末・明治の手紙	オランダ			菜根出版	1993
76	ハリス	日本滞在記　上中下	アメリカ	1856〜62		岩波書店	1953〜54
77	ハリス	下田から小田原まで（「外国人の見た日本2」所収）	アメリカ	1856〜62		筑摩書房	1961
78	ハーン(小泉八雲)	神国日本—解明への一試論	イギリス	1890〜1904		東洋文庫	1976
79	ハーン(小泉八雲)	日本の風土（「外国人の見た日本3」所収）	イギリス	1890〜1904		筑摩書房	1961
80	ハーン(小泉八雲)	東洋の土を踏んだ日（「小泉八雲作品集1」所収）	イギリス	1890〜1904		河出書房新社	1977
81	ハーン(小泉八雲)	英語教師の日記（「小泉八雲作品集1」所収）	イギリス	1890〜1904		河出書房新社	1977
82	ピゴット	断たれたきずな	イギリス	1888〜91	1950	時事通信社	1951
83	ヒューブナー	オーストリア外交官の明治維新	オーストリア	1871	1873	新人物往来社	1988
84	ヒュースケン	日本日記	オランダ	1856〜61		岩波書店	1989
85	ヒロン	日本王国記	スペイン	16世紀末〜1619頃		岩波書店	1965
86	フィッシャー	100年前の日本文化	オーストリア	1895	1897	中央公論社	1994
87	フィッシャー	明治日本印象記	オーストリア			講談社	2001
88	フィッセル	日本風俗備考　1,2	オランダ	1820〜29	1833	東洋文庫	1978
89	フェスカ	日本地産論	ドイツ	1882〜94	1890	農山漁村文化協会	1977
90	フェルディナント	オーストリア皇太子の日本日記 明治二十六年夏の記録	オーストリア	1893	1895・96	講談社	2005
91	フォーチュン	江戸と北京	イギリス	1860〜61	1863	鹿川書店	1969
92	ブスケ	日本見聞記　1,2	フランス	1872〜76	1877	みすず書房	1977
93	ブラウン	S.R.ブラウン書簡集	アメリカ	1859〜79		日本基督教団出版局	1965
94	ブラック	ヤング・ジャパン　1〜3	イギリス	1858頃〜80	1880	東洋文庫	1970
95	ブラック	みかどの都	イギリス	1861頃	1870	横浜社	1968
96	ブラント	ドイツの公使の見た明治維新	ドイツ	1862〜	1901〜02	新人物往来社	1987
97	ブラントン	お雇い外人の見た近代日本	イギリス	1868〜76		講談社	1986
98	フレイザー	英国公使夫人の見た明治日本	イギリス	1889〜94	1899	淡交社	1988
99	フロイス	日欧文化比較	ポルトガル	1562〜96	1585編集	岩波書店	1965
100	フロイス	イエズス会日本年報　上,下	ポルトガル	1562〜96	1581〜1627	雄松堂出版	1969
101	ベアト	幕末日本の風景と人びと	イギリス	1863	1870	明石書店	1987
102	ベーコン	華族女学校教師の見た明治日本の内側	アメリカ	1888〜89	1894	中央公論社	1994
103	ヘボン	ヘボンの書簡集	アメリカ	1859〜1892		岩波書店	1959
104	ヘボン	ヘボンの手紙	アメリカ	1859〜1892		有隣堂	1976
105	ペリー	日本遠征日記	アメリカ	1853・54	1856	雄松堂出版	1985
106	ペリー	ペルリ提督日本遠征記　1〜4	アメリカ	1853・54		岩波書店	1948〜55
107	ベルソール	明治滞在日記	フランス	1897〜98	1900	新人物往来社	1989
108	ベルツ	ベルツの日記　上,下	ドイツ	1876〜1905,08	1931	岩波書店	1979
109	ベルツ	日本人の身体的特徴（「日本文化論集」所収）	ドイツ	1876〜1905,08	1883,85	東海大学出版会	2001
110	ベルツ	芸術と生活における日本人の体型（「日本文化論集」所収）	ドイツ	1876〜1905,08	1903	東海大学出版会	2001
111	ベルツ	日本人の心理（「日本文化論集」所収）	ドイツ	1876〜1905,08	1904	東海大学出版会	2001
112	ヘールツ	日本年報	オランダ	1869〜	1870〜73	雄松堂出版	1983
113	ボーヴォワル	ジャポン1867年	フランス	1867	1881	有隣堂	1984
114	ホジソン	長崎函館滞在記	イギリス	1859〜60	1861	雄松堂出版	1984

示したものである。

3.1 引き摺り足

外国人の見聞録にみられる特徴として，歩行の際に足を引き摺るという点が指摘されている。例えば，マクドナルド(1848～49)は長崎の女性を観察して「彼女たちは（中略）すり足で歩き…」[42]と記録し，ハイネ(1853)も女性の歩行を「足を引きずって歩く」[43]と表現する。この特徴は明治期に至っても指摘され，ギメ(1876)は「三本女性は，まさしく私たちがすでに知っている屏風の絵のようだ。膝を締めて歩き，足を引きずり…」[44]と神奈川での見聞を認めている。

引き摺り足は女性にのみ表れた歩行の特徴ではなかったように思われる。例えば，マローン(1860～61)が男性の歩行について記した「足を前方におしだしている」[45]という一文などは，足を引き摺って歩く様子を表現したものとみられるためである。

表2によれば，引き摺り足の歩行の様態を生み出した要因について，見聞録にはほとんど記されていないことがわかる。しかし，ロチ(1885, 1900～01)が日本女性には「高い木製の履物（高下駄―引用者注）をひきずる世襲的な習慣」[46]があると記していることからすれば，引き摺り足という特徴は履物（とりわけ下駄）に起因していることも見逃すことはできない。

こうした引き摺り足の歩行は，武智鉄二がかつての農民の歩行について，「ぞろぞろと足をひきずりながら，歩いたものだったに違いない」[47]と言及していることと符号する。上記の外国人の観察が主に都市において行われたことを考慮するならば，かつての日本にはロチの言うような「世襲的な習慣」として，引き摺り足の歩行が広く行われていたと推されよう。

表1 つづく

115	ボードウァン	オランダ領事の幕末維新	オランダ	1859～74		新人物往来社	1987
116	ボヌタン	極東 (「モンブランの日本見聞記」所収)	フランス	1886	1887	新人物往来社	1987
117	ポロンスキー	ロシア人日本滞在記	ロシア		1871	原書房	1974
118	ポンティング	英国特派員の明治紀行	イギリス	1902・06	1910	新人物往来社	1988
119	ポンペ	日本滞在見聞記	オランダ	1857～62	1867～68	雄松堂出版	1968
120	マクドナルド	日本回想記	アメリカ	1848～49	1923	刀水書房	1979
121	マローン	日本と中国	ドイツ	1860～61	1863	雄松堂出版	2002
122	ミットフォード	ある英国外交官の見た明治維新	イギリス	1866～70		新人物往来社	1986
123	ミットフォード	ミットフォード日本日記	イギリス	1866～70	1906	講談社	2001
124	ミットフォード	英国外交官の見た幕末維新	イギリス	1866～70	1871	新人物往来社	1985
125	ミュラー	東京	ドイツ	1871～75	1888	ヘキストジャパン	1975
126	ムンチンガー	ドイツ宣教師の見た明治社会	ドイツ			新人物往来社	1987
127	メイラン	日本	オランダ	1827	1830	雄松堂出版	2002
128	メーチニコフ	回想の明治維新	ロシア	1874～2年程	1883～84	岩波書店	1987
129	メーチニコフ	東京外国語学校の思い出	ロシア	1874～2年程	1885	岩波書店	1987
130	メーチニコフ	亡命ロシア人の見た明治維新	ロシア	1874～2年程	1876～77	講談社	1982
131	モース	日本その日その日 1～3	アメリカ	1877・78～79・82	1917	東洋文庫	1970～71
132	モース	日本人の住まい	アメリカ	1877・78～79・82		八坂書房	1991
133	モース	モースのスケッチブック	アメリカ	1877・78～79・82		雄松堂出版	2002
134	モール	ドイツ貴族の明治宮延記	ドイツ	1887～89	1904	新人物往来社	1988
135	モンブラン	日本 (「モンブランの日本見聞記」所収)	フランス	1861～62	1865～94	新人物往来社	1987
136	ヤング	グラント将軍日本訪問記	アメリカ	1879	1879	雄松堂出版	1983
137	リース	ドイツ歴史学者の天皇国家観	ドイツ			新人物往来社	1988
138	リュードルフ	グレタ号日本通商記	ドイツ	1855	1857	雄松堂出版	1984
139	リンダウ	スイス領事の見た幕末日本	スイス	1859～1862	1864	新人物往来社	1986
140	ルサン	フランス士官の下関海戦記	フランス	1863～65	1866	新人物往来社	1987
141	レガメ	日本素描紀行	フランス	1876,99	1903	雄松堂出版	1983
142	レザーノフ	日本滞在記 1804～1805	ロシア	1804～05		岩波書店	2000
143	レフィスゾーン	江戸参府日記	オランダ	1845～50		雄松堂出版	2003
144	ローエル	極東の魂	アメリカ	1883～1893	1888	公論社	1977
145	ロチ	お菊さん	フランス	1885	1893	岩波書店	1929
146	ロチ	秋の日本	フランス	1885	1889	角川書店	1953
147	ロチ	ロチのニッポン日記	フランス	1885・1900～01	1885-1901	有隣堂	1979

本表の作成にあたっては、以下の文献を参考として用いた。
・国立国会図書館専門資料館編:『世界の見た日本 国立国会図書館所蔵日本関係翻訳図書目録』国立国会図書館,1989
・高橋仁編:『事典 外国人の見た日本』日外アソシエーツ,1992

表２　日本人の歩行の特徴

著者	タイトル	国籍	来日の年代	見聞の場所	見聞の対象	歩行の特徴							歩行の規制	
						引き摺り足	歩行の音	爪先歩行	前傾姿勢	小股	内股	奇妙な歩き方	歩き難い	歩き易い
フロイス	日欧文化比較	ポルトガル	1562〜96		男性			足半						
ツュンベリー	江戸参府随行記	スウェーデン	1775〜76		男性		草履						着物	股引/着物の裾をまくる
メイラン	日本	オランダ	1827	長崎	男性									袴
マクドナルド	日本回想記	アメリカ	1848〜49	長崎	女性	○								
ゴンチャロフ	日本渡航記	ロシア	1853						○				草履	
ハイネ	世界周航日本への旅	ドイツ	1853	下田	女性	○				着物	着物	下駄	着物	
カッテンディーケ	長崎海軍伝習所の日々	オランダ	1857〜59	長崎	男性								着物	
ポードヴァン	オランダ領事の幕末維新	オランダ	1859〜74	長崎	女性						○		着物	
スミス	日本における十週間	イギリス	1860		男性		下駄/草履							草鞋
マローン	日本と中国	ドイツ	1860〜61		男性	○			○			○	着物	
ヴェルナー	エルベ号船長幕末記	ドイツ	1860〜62		女性					着物		下駄	着物	
シュリーマン	日本中国旅行記	ドイツ	1865	江戸	女性					着物			着物	
スエンソン	江戸幕末滞在記	デンマーク	1866〜67		男性						○		草履	草鞋
ヘールツ	日本年報	オランダ	1869〜										着物	
ブスケ	日本見聞記	フランス	1872〜76										○	○
チェンバレン	日本事物誌	イギリス	1873										着物	
コバルピアス	日本旅行記	メキシコ	1874	横浜									着物/下駄	足袋
ギメ	1876ボンジュールかながわ	フランス	1876	横浜	女性	○					○			
ベルツ	日本人の心理	ドイツ	1876〜1905		女性								着物	
モース	日本その日その日	アメリカ	1877	横浜・東京			下駄・草履							
バード(女性)	日本奥地紀行	イギリス	1878		女性					○		○		
	日本紀行	イギリス	1878		女性				着物	着物/下駄	○	下駄	着物/下駄	
ロチ	秋の日本	フランス	1885	東京	女性	下駄					○	下駄	着物	
	お菊さん	フランス	1885	東京									着物/下駄	
	ロチの日本日記	フランス	1885	長崎		下駄	下駄		○		○		下駄	
ベーコン	華族女学校教師の見た明治日本の内側	アメリカ	1888〜89										着物	
ハーン（＝小泉八雲）	日本の風土	イギリス	1890〜1904	松江				下駄	下駄			下駄		
	東洋の土を踏んだ日	イギリス	1890〜1904	横浜			下駄							
カヴァリヨン	254日世界一周	フランス	1891	東京	男性									
フェルディナント	オーストリア皇太子の日本日記	オーストリア	1893	長崎						草履/下駄				洋服
シドモア(女性)	日本紀行	アメリカ		横浜	女性		下駄/草履							
サンソム(女性)	東京に暮す	イギリス	1928〜36	東京			下駄						下駄	

3.2 歩行の音

日本人が音をたてて歩行することは男女を問わず指摘されているが，外国人の観察記録によれば，それは日本の履物に起因するところが大きいとみえる。このことは，ツュンベリー(1775〜76)が「草履には踵の部分がないので，歩くとスリッパのようにパタパタと音がする。」[48]と記していることや，スミス(1860)の「履き物のかかとは留めていないので，石の歩道を歩くとき上ったり，下ったりし，通りの人ごみの中を進むときたえずやかましい音をたてる。」[49]という記述にも顕著に表れている。とりわけ，下駄が発する音は外国人にとって印象的であったらしく，例えばロチは「足駄（高下駄—引用者注）は敷石の上に騒々しい音を立てる。」[50]と書き記している[51]。

歩行時の音についてとりわけ強い関心を示して観察したのはハーン（＝小泉八雲，1890〜1904）であろう。彼は日本に到着して間もなく，横浜において次のような感想を書き留めている[52]。

「日本の下駄は，それをはいて歩くと，いずれもみな，右左わずかに違った音がする—片方がクリンといえば，もう一方がクランと鳴る。だからその足音は，微妙に異なる二拍子のこだまとなって響く。駅のあたりの舗装された道などでは，ことのほかよく響く。」

このように，当時代において一般的に用いられていた草履や下駄といった履物は踵が固定されておらず，その構造が歩行時に音を発生させていたといえよう。この類の履物の構造上，足と履物が常に接するのは鼻緒の部分のみであったので，足を上げていても履物が足先にぶら下がり地面に擦れるような状態になり，西洋の「靴」と比べて特徴的な音が生ずるのである。また，そのことと併せて，上述したような「引き摺り足」の歩行習慣も歩行時に音を発生させていた要因としてあげることができよう。

3.3 爪先歩行

爪先歩行について記した外国人は少数であるが，この特徴も履物との関係から理解されたようであり，古くは16世紀末にフロイス(1562〜96)によって指摘されている。フロイスは自らの属する西洋文明と比較して，「われわれの間では足を全部地につけて歩く。日本では，足の半分の履物（足半（あしなか）—引用者注）の上で足の先だけで歩く。」[53]と観察記録を認めた。フロイスのいう「足の半分の履物」（足半）とは，足の裏を保護するためや作業をしやすくするために作られたといわれ，足の指と踵は完全に台座からはみ出しており，爪先で力を入れやすいように工夫された履物である[54]。野村雅一も足半に触れて，「踵のないこのような履物の存在は，爪先で地面を蹴るようにして歩く日本人の歩行様態をよく反映している」[55]と指摘している。

足半のような特殊な履物の着用時でなくとも，爪先歩行の形態は表れていたようである。例えば，ハーンは日本人が下駄を履いた姿を見て次のように記録している[56]。

「日本人は，誰もみな，足の爪先で歩く。（中略）その足を前に踏み出すときには，かならず爪先から先につく。これはむりもないことで，日本の下駄だと，かかとが下駄にも地面にもつかず，そのうえ下駄の台が楔形をしているので，どうしても足が前のめりになるから，これ以外の歩き方はないわけだ。」

ハーンの記述が暗に示しているように，爪先歩行は日本古来の履物の構造から必然的に発生した特徴であったと推察されよう。また，踵が固定されていない草履や下駄の鼻緒は，足先でつっかけるようにして進むことによってはじめて締まるといわれる[57]。だとすれば，爪先歩行とは履物が脱げないように配慮した歩き方でもあったといわねばならない。

以上で検討した，引き摺り足・歩行の音・爪先歩行といった諸特徴と，日本人が日常的に使用していた履物との間には，無視しえない関係があったと指摘することができる。鼻緒をうまく足先にかけて進むには，引き摺り足や爪先歩行は効率が良く，その歩き方が特徴的な音を生じさせていたと考えることができるからである。

3.4 前傾姿勢

日本人の前傾姿勢での歩行も，男女を問わず指摘された特徴である。ゴンチャロフ(1853)は「日本人がまっすぐな姿勢で歩いたり，あるいは立ったりするのを一度も見かけなかった。必ず身体を半ば前に屈めて，…」[58]と前傾姿勢について記す。その他に歩行時の前傾姿勢を指摘したものをあげてみると，男性についての「姿勢はやや前かがみ」[59]という記述や，女性についての「すべての女性が前かがみに

なっている」[60]，「心もち前方に傾く腰は」[61] といった類の見聞が見受けられる。

こうして眺めてみると，前傾姿勢は歩行時にのみ表れた動作というよりも，日本人の姿勢そのものがやや前屈みであったために，歩行の際にもそのまま前傾の姿勢が確保されたということのように思える。ただし，その一方で，先の「爪先歩行」が前傾姿勢での歩行を必然化させていた可能性も考慮しておくべきであろう。

3.5　小股・内股

表2によれば，日本人の小股ないし内股の歩行は，主として女性に見られた特徴であったことがわかる。まず，小股の歩行について記した見聞録をあげていきたい。

これについてハイネは，「この服（女性の服装—引用者注）は静かにしていれば身体全体をうまくおおっているが，激しく運動すると，容易に胸がすっかりはだけるし，足の一部も見えてしまう。それゆえ，身分の高い婦人は，小股でゆっくりと歩くのである。」[62] と説明している。また，シュリーマン(1865)は立ち寄った茶屋で働く少女の着物を観察し，「その着物の裾は少女たちが辛うじて動けるほどの歩幅にしか開かず，…」[63] と記した。さらに，バードは女性の着物と併せて履物にも着目して，「脚を堅く着物でつつみ，高い木の靴〔下駄—訳者注〕で内またによちよち歩いているので，ほんの短い歩幅でしか歩けない。」[64] と指摘している。以上の諸記述によれば，女性の小股歩行は，主として動きを規制する着物の影響を受けて必然化した特徴であることがうかがえよう。

一方，内股の歩行について，ボードヴァン(1859〜74)は「内股で歩くので身のこなしが優雅に見えません。私は彼女たちを美しいとは思えません。」[65] と記し，バードも「女性はとても貴族的で，弱々しい歩き方をして，しかも内またである。」[66] と記録している。また，ハイネの「彼女は歩くさいには，両足で半円を描くようにするのである。」[67] という説明や，ギメの「膝を締めて歩き…」[68] という表現，さらにロチの「内側に曲がった足」[69]，「婦人たちは踵を外側にして歩く」[70] といった観察記録も，内股の歩行を示すものであろう。ただし，見聞録をみる限りでは，「小股」を示す記述とは異なり，「内股」は着物や履物の影響を強く受けていたとはとらえられていなかったようである。

3.6　奇妙な歩き方

日本人の歩行を奇妙な動作としてとらえた外国人は少なくないが，彼らはどのような点を奇妙であると感じたのであろうか。

ハイネは女性の歩行を指して，「小さな竹馬に似た靴〔下駄—訳者注〕（足の裏と踵の下に三ないし四インチの板で作ったサンダル）で，足もともおぼつかないように奇妙な格好で歩く」[71] と書き留めた。また，マローンは「歩行は，優美で男性的な強さに欠け，自意識の表情に乏しい。それは厳密に言うと，歩行といったものではない。」[72] と記し，抽象的な表現ではあるが男性の歩行を自らのそれとは明らかに異質な動作であると感じたことが示されている。さらに，ヴェルナー(1860〜62)は「高下駄で歩くにはなかなか技巧が必要だ。なんとしても不安定なので，つねにバランスをとらねばならず，歩く姿はまことにグロテスクだ。」[73] と記録し，加えてバードも「こんな代物（下駄—引用者注）は，日本人の持前の歩き方の格好悪さを増長させるだけである。」[74] と女性の歩行の印象を認めている。

上記の諸記述の内容をみても明らかなように，外国人は下駄を履いたときの日本人の歩行をとりわけ奇妙であると感じていたことがわかる。上記のほかにも，ロチ[75]やハーン[76]が日本人の歩行を奇妙なものとして記しているが，いずれもその理由を下駄の着用に求めているのである。

4.　歩行の規制

4.1　装いによる歩行の規制

日本人の歩行について記した外国人の目線は，上述したような歩行の特徴のみにとどまらず，歩行に制限を加えていた諸要因をもとらえていた。彼らの記すところによると，歩行を含む日本人の運動は，主として着物や履物などといった「装い」に規制されていたとみることができる。これは，既述のように野村雅一が指摘したことでもあるが，明治初期においてすでにブスケ(1872〜76)によって，「服装は時には我々の知らないうちに，習俗や立居振舞に決定的な影響を与えている。」[77] と明確に指摘されている。

この問題は，マローンの「この履物（草履—引用者注）とぴったりした長いきちんと重ねあわせたス

カートを，幅ひろの帯で結んでいるのを見れば，これは運動の民ではないということが外見上はっきりする。」[78] という記述に如実に示されている。マローンがいうように，日本人の装いが外国人の意図するところの「運動」に適していなかったことについては，カッテンディーケ(1857～59)が「日本の服装は艦上にせよ，また陸上にせよ，すべての教練に不向きなものである。」[79] と認めていることからもうかがえよう。

着物や履物によって歩行が規制されていたことは，上記のほかにも多くの外国人が見聞録に書き留めた項目であった。例えば，コバルピアス(1874)は日本の下駄について「実際歩きにくい」[80] と述べ，加えて「着物は体の前でぴったりと重ね合わされているので，裾の方で広くゆとりをとっていないかぎり容易には歩きにくいはずである。」[81] と指摘する。また，バードが女性の着物を指して「窮屈で移動の邪魔になる。」[82] と記したことや，カヴァリヨン(1891)の「木靴（下駄―引用者注）を履いているのでは，落着いて歩けない。」[83] という一文なども，同様の指摘であると見なすことができよう。

このように，体に密着した日本の着物は人々の運動を極めて制限し，踵が固定されていない日常的な履物（草履・下駄）は歩行を困難にしていると外国人はとらえたのであり，表2をみてもわかるように，その傾向は男女ともにみられたのである。ただし，ここでいわれる着物とは，身丈が足首あたりまであるようなものを指し示している。その形態ゆえに運動に支障をきたすのであって，後述するような旅人の装いに関しては歩行を規制する要因としてはとらえられていない。

4.2 装いの異文化体験にみる歩行の規制

幕末～明治初期において来日した外国人の中には，日本の着物や履物を実際に着用して，その感想を見聞録に認めたものもいた。一方，近世において外国人と接触し，洋服を着用した日本人の記録も僅かではあるが今に残されている。そこで以下では，当該の記述を掲げ比較検討することにしたい。

まず，外国人の和装体験に関するものとして，ゴンチャロフの体験談をみておきたい。ゴンチャロフ一行は大沢豊後守という人物の屋敷での配慮として，西洋風の靴ではなく「長靴」と「上ばき」，すなわち日本の足袋と草履を着用して会見に臨み，そこで次のような出来事に遭遇した[84]。

「『上ばき，上ばき！』―と不意に誰かのささやきが聞える。見ると―私は長靴のままだ。上ばきはどこへいったのか？　仲間たちを追っていくと，落後者は私一人ではなく，あちらこちらでうつ向いて上ばきを拾っている。（中略）お辞儀をしながら，ふと足もとを見ると―いまいましい上ばきがまた脱げてしまって，長靴の横に転がっている。」

このように，大沢豊後守の待つ部屋に向かう途中で彼らの上ばきは幾度となく脱げてしまったのだという。この体験談から，踵が固定されていない日本の草履が彼らにとって歩きにくい履物であったことがうかがえる。無論，草履が脱げた原因は，この履物が日頃履いている「靴」とは全く異なる構造であったことに対する戸惑いと受け取ることもできよう。しかしそれ以上に，彼らの歩行が鼻緒を足先にかけて進むような日本人の歩行（引き摺り足・爪先歩行）とは異質であったことを示しているような気がしてならない。

また，華族女学校の女性教師のベーコン(1888～89)は「家のなかでは日本の着物をいつも着ていますが，歩きにくいので外出するときは見苦しい白い洋服を着なければなりません。」[85] と述べ，実体験から女性の着物が歩行を規制していた点を指摘する。日本の着物は，外国人にとって歩きにくい衣服であったことが確認されよう。

一方，日本人の洋装体験としては，古くは天正10(1582)年に渡欧した天正遣欧使節に関する記録（『天正遣欧使節記』）が伝えられている。使節の一人である千々石ミゲルは，ヨーロッパの服装について，「それ（洋服―引用者注）に慣れなかったり，使ったことがなければ，いかにも不快かもしれない。しかし実際よく考えてみると，この服装から生じる利益は多い。第一，体のいかなる動作もこれに妨げられるということがない。」[86] との感想を抱いていたとされている。この文脈から，日本人が和服と比較したうえで洋服の動きやすさを実感している様子が見受けられる。しかし，この文献は使節の記録に基づいてイエズス会のデ・サンデを中心に対話形式で編まれた創作で，1590年にマカオで出版されたものである。そのため，イエズス会側の政治的意図が上記の文脈に反映されている可能性も否めな

い。

そこで，幕末期において播磨〜江戸間を航海中に漂流し，米国船に救助されて渡米した浜田彦蔵の自伝に目を向けてみたい。彦蔵は初めての洋装体験を「生涯のうちで洋服を着たのは，これが初めてだった。からだがひどく窮屈なように感じた。でも洋服は自分の着物よりもはるかに暖かだったし，そのうえ仕事をするのに便利だ。」[87] と振り返る。したがって，日頃和服を身に纏う日本人にとっても，洋服は「動作を妨げない」と感じさせる衣服であったといえよう。また，日本人自身が洋服の着用という異文化体験からその動きやすさを実感していたことは，外国人のいうように日本の着物が歩行を含む動作を強く規制していたことを相対化しうるのである。

明治期以降に洋服が人々の間に徐々に普及していくが，そのことがその後の日本人の歩行に影響を与えたであろうことを，次に掲げるフェルディナント(1893)の記述にみることができる[88]。

「日本人が長いフロックコートとシルクハット姿でいかめしく大股で歩き，ペコペコとお辞儀をしているかたわらに，別の日本人が伝統的な和服姿であらわれると，愉快というよりも，むしろ奇異に感じてしまう。わたしの目の前を，男や女が通り過ぎてゆく，よく見ると，伝統的風俗に忠実であり，休みなく扇をパタパタとあおぎ，草履や下駄をはき，小股で足早に歩いている。」

フェルディナントは，洋服・和服が許容する歩き方を，それぞれ「大股」「小股」という言葉を用いて対比的に表現したのである。

4.3　旅人の装いにみる歩行規制の緩和

これまで述べてきたように，かつての日本人の歩行は着物や履物に強く規制されていたが，日常的にそのような装いで生活した人々であっても，時として装いの規制を緩和する工夫が必要とされた。その好例として，近世後期にかけて庶民層に大流行した「旅」という行動をあげることができる。徒歩が主たる移動手段であった当時の旅においては，旅人は連日のように長距離を歩いた。例えば，近世後期における江戸近郊に暮らす庶民は，伊勢参宮の際に，1日平均で8〜9里（約31〜35 km)程度の距離を歩いたという[89]。

それでは，かつての旅人はどのようにして着物や履物から受ける規制を逃れたのであろうか。ツュンベリーは日本の着物が「歩いたり，旅をしたり，風のある悪天候の時や，日常の仕事をするさいには，動きにくく邪魔となる」[90] と指摘したうえで，「肌につける股引は，旅人や武士以外は滅多に用いない。彼らは敏捷に歩いたり走ったりするために，着物を短く端折って裾をまくり上げて」[91] いたと観察している。また，ブラック（1858頃〜80)も幕末期における旅の様子を，「平民達は歩きやすいように，着物を端折り，大部分の者はかなり容易に旅していた。」[92] と記録している。長距離を歩行するためには，動きを特に妨げる裾の部分をまくり上げ，股引を着用するなどといった工夫がなされていたことがうかがえよう[93]。

長距離歩行のための工夫は履物にも施されていた。それは草鞋の着用に他ならないが，この履物はツュンベリーが「旅をする時は藁で撚った三本の紐がついた草鞋を用意する。その紐で草鞋が脱げないよう，足と脚にきつく縛る。」[94] と記したように，踵が固定されていない草履とは異なり台座に足がしっかりと固定されたものであった。草鞋の効果は，スミスが「わらでできたひもによって足首にしっかりと結ばれており，速くしかも楽に歩くことができる。」[95] と賞賛し，スエンソン(1866〜67,70)も「身体の動きが自由にとれる」[96] と記したように，外国人によっても理解されていた。

こうして着物や履物による歩行の規制が緩和されたのであるが，そのことによって旅人の歩行の様態が際立って変化したかどうかは定かではない。しかし，着物の裾をたくし上げることによって可動域が広がり，通常よりも歩幅を大きくとることが可能になったと考えられる。そのことは，天保4(1833)年に刊行された道中記（＝旅行案内書）に雨天時に滑らないための「歩き方」として次のような注意が促されていることからもうかがうことができる[97]。

「足をそろえて一足とびに飛やうにいかにも細にあるくべし，決してすべる事なし，常の如くおほまたにあるく時は留るあしにのみ力のこりてふみ出す足にちからなければ必すべる，一足あるきにふみ出すときは左右の足に惣身の力入るゆゑすべることなし」

これは雨天時には小股で歩くよう促した一文であるが，「常の如くおほまたにあるく時は」とあることから，旅の道中では着物から受ける動作の制約が緩

和されたために，ある程度「大股」での歩行が可能であったと推し量ることができよう。

また，草履と同じく草鞋も鼻緒を足先にかけて進む構造になっていたことからすれば，少なくとも「爪先歩行」の特徴に目立った変化は起らず，加えて草鞋は草履と違って踵が履物に固定されているので，「歩行時の音」は少なくなる傾向にあったといえよう。

4.4 歩行の習性

これまで検討してきたように，外国人は日本人の歩行の特徴を見事に観察していたといえるが，彼らの中には「歩き方」にとどまらず歩行に関する習性にまで及んで書き留めたものがいた。その代表的な存在がアメリカ人のモース(1877,78〜79,82)である。

モースは東京において町行く人々の歩行の習性を，「男も女も子供も，歩調をそろえて歩くということを，決してしない。(中略) 我国では学校児童までが，歩調をそろえるのに，日本人は歩くのに全然律動が無いのは，特に目につく。我々は直ちに日本人が，我国のように一緒に踊ることが無いのに気がつく。」[98] と観察している。また，モースは東京の人々の運動について，「反射運動というようなものは見られず，我々が即座に飛びのくような場合にも，彼等はぼんやりした形でのろのろと横に寄る。日本人はこんなことにかけては誠に遅く，我々の素速い動作に吃驚(びっくり)する。」[99] と記録する。

モースの来日した19世紀末頃の東京の人々には，少なからず上記のような習性があったのであろうか。ここで，明治初期の日本人の服装について観察したボヌタン(1886)の記述を以下に引いておきたい[100]。

「現在上流階級の日本人は，完全に我々と同じ服装をしている。(中略) 庶民と農夫だけが，一部ではあるが，昔の装いを守っている。つまり《着物》という，興味ある柄の，色物の綿布の長衣と股引の姿である。男の着物としての絹は，日ごとに見られなくなってきている。だが履物の方は依然守られている。藁の草履，《せった》それに《下駄》である。」

また，カヴァリヨンは同時期の東京において「ヨーロッパ的な服装をしている国の役人を除いて，我々の服を採用しているのは，殆ど案内人だけと言ってよい。」[101] と記し，クロウ(1881)も「ほとんどすべての日本人は，男も女も高い木の下駄をはいている。」[102] と記述している。

したがって，この時期において洋服は世間一般にはさほど普及しておらず，履物は草履や下駄がいまだ主流であったと推されよう。先で検討したように，幕末〜明治初期頃の日本人の歩行が着物や履物に強く規制されていたことを考えれば，モースのいう「歩くのに全然律動がない」，「反射運動というようなものは見られず」などといった習性もそれらに起因している可能性が指摘されよう。

ところで，すでに触れたように，従前の諸研究においては近代以前の日本人が「ナンバ」の姿勢で歩行していたことが指摘されてきたが，本研究で基本史料とした訪日外国人の見聞録からは，歩行の特徴としてナンバを思わせるものは抽出されなかった。しかしながら，そのことが，かつての日本人がナンバで歩いていなかったことを証かしうるものと即断することはできまい。見聞録の著者が対象としたのは主に都市の人々であるが，前述したように，武智鉄二によって，ナンバは近世後期の都市においてはすでに消滅していたと指摘されているからである。ただし，都市であっても旅人をはじめそこに生活の拠点を置かない人々も数多く歩いていたことを考慮すれば，都市にもナンバの姿勢で歩行するものが存在していた可能性は大いにありうる。それでも，ナンバという特徴的な動作に外国人の目が注がれなかったという事実は何を意味するのであろうか。

一つは，ナンバが実際には一見してそれと判明しないほどに，目立たない動作であったことが考えられる。武智は日常行動のナンバを，「右足が出たときには右肩も少し出るが，背筋をしっかり伸ばして，背筋の力で肩の揺れを留め，エネルギーのロスを最小限とするように心がける。」[103] と述べた。ゆえに，仮にかつての日本人がこの歩き方を実践していたのであれば，外国人の客観的な目線がこの特徴を見逃したとしても何ら不思議ではあるまい。また，外国人がナンバを見逃したのではなく，彼らが指摘した歩行に関する諸特徴のそれぞれによってナンバ的なる歩行が全体として形成されていたのかもしれない。しかし，外国人が明確にナンバを指摘していない以上，その当時の日本人がナンバの姿勢で歩いていなかったという可能性も想定しておかねばなるまい。

5. 結　　び

本研究において検討した結果をまとめると，以下のように整理することができる。

1. 従前の諸研究においては，かつての日本人の歩行が「ナンバ」であったとの見解が大半を占めているが，そのことが史料の詳細な検討によって明らかにされてきたわけではなく，いまだ確証は得られていない段階にあるといわねばならない。しかし，どの識者にも共通した見解として，近代以前の日本人の歩行が今日のそれとは異質であるということが確認された。
2. 外国人の見聞録の検討により，日本人の歩行の特徴として，引き摺り足，歩行の音，爪先歩行，前傾姿勢，小股・内股，奇妙な歩き方，といった項目が抽出された。このうち，引き摺り足，歩行の音，爪先歩行，奇妙な歩き方は，踵が固定されていない日本の日常的な履物（草履・下駄）の影響を強く受けて生じ，小股・内股は主に女性に見られ，とりわけ小股は動きを規制する着物の影響によって必然化した特徴であることが指摘された。
3. 歩行をはじめとする日本人の運動は，日常的に着用する着物や履物に強く規制されていた。そのことは，実際に日本の着物や履物を着用した外国人が「動きにくい」と感じ，洋服を着用した日本人が「動きやすい」と感じていたことからも確かめられた。しかし，こうした装いから受ける規制を緩和する工夫も時としてなされ，旅人は動きを妨げる着物の裾の部分をまくり上げ，草履とは異なり踵が台座に固定される草鞋を履いて長距離の歩行に臨んだ。ゆえに，旅人は通常よりも「大股」で歩行することが可能になったと思われる。
4. 明治初期における日本人の歩行に関する習性として，歩行時の律動や反射運動の欠如を指摘した外国人もいるが，当時の洋装の普及状況からみて，その習性も日本の着物や履物に起因していたように思われる。また，外国人の見聞録からはナンバの歩行に関する記述は見出せなかったものの，そのことが即ナンバ歩行の存在を否定するものととらえることはできず，この問題については今後一層の検討が必要とされよう。

注記および引用・参考文献

1) 大迫正文:「身体構造に規制される動き」『スポーツ人類学』明和出版，2004, p. 31.
2) 訪日外国人の見聞録の史料的価値について，渡辺京二は次のように説明する。
「滅んだ古い日本文明の在りし日の姿を偲ぶには，私たちは異邦人の証言に頼らねばならない。なぜなら，私たちの祖先があまりにも当然のこととして記述しなかったこと，いや記述以前に自覚すらしなかった自国の文明の特徴が，文化人類学の定石通り，異邦人によって記録されているからである。」（渡辺京二:『逝きし世の面影』平凡社，2005, pp. 18–19)。
3) ただし，本研究では当該史料を原書ではなく訳書によって見ていくので，その文章は訳者による何らかの解釈がはたらいている可能性があることも念頭においておかねばなるまい。
4) 立川昭二は，天明期 (1781〜1789) と明治 19 (1886) 年の日本人男女の身長を比較して，このおよそ 100 年間において，日本人の体格に際立った変化が見られなかったことを指摘している（立川昭二: 日本人のからだに見る 100 年「中央公論」100 巻 12 号，中央公論社，1985. 11, p. 659)。したがって，本研究で対象とする幕末〜明治初期において，体格に起因して日本人の歩行の様態が著しく変化したことはなかったと推される。
5) 三浦雅士:『身体の零度』講談社，1994.
6) 野村雅一:『身ぶりとしぐさの人類学』中央公論社，1996.
7) 中房敏朗:「ナンバ」考: 歩き方にみる日本的特性「仙台大学紀要」28 巻 1 号，仙台大学学術会，1996, pp. 23–31.
8) 渡辺京二:『逝きし世の面影』平凡社，2005, pp. 19–20.
9) 関山直太郎は幕末期における身分別人口の割合を，武士が 6〜7%，農民が 80〜85%，町人が 5〜6%，神官・僧尼が 1.5%，エタ・非人が 1.6%程度であったと推測している（関山直太郎:『近世日本の人口構造』吉川弘文館，1958, p. 312)。
10) 無論，都市であっても旅人や近隣の農民など，そこに生活の拠点をおいていない人々も多く歩いていたであろうことは想像に難くない。
11) 渡会公治:「ナンバ」歩きを考える「トレーニング・ジャーナル」253 号，ブックハウス・

エイチディ，2000. 11, p. 69.
12) 武智鉄二:『舞踊の芸』東京書籍，1985, pp. 148-149.
また，手の振りについては「能や狂言を見ても分かるように，原則的に，腕は垂直にさげられたまま，足だけで歩行するのである。」(武智鉄二:「伝統と断絶」『伝統と断絶（新装復刻)』風塵社，1989, p. 27) と指摘している。
13) また，武智はかつての日本の農民が足を引き摺りながら歩いていた点も指摘している（武智鉄二:「演劇伝統論」『定本・武智歌舞伎⑥演劇研究』三一書房，1981, p. 346).
14) 武智鉄二:「伝統と断絶」『伝統と断絶（新装復刻)』風塵社，1989, p. 32.
15) 三島由紀夫・武智鉄二（対談):「現代歌舞伎への絶縁状」『定本武智歌舞伎⑥演劇研究』三一書房，1981, p. 245.
16) 武智鉄二:「伝統と断絶」『伝統と断絶（新装復刻)』風塵社，1989, p. 28/ 武智鉄二:「身体行動論—歌舞伎論序説」『定本武智歌舞伎①歌舞伎Ⅰ』三一書房，1978, pp. 169-170.
17) 武智鉄二:『舞踊の芸』東京書籍，1985, pp. 273-274.
18) 蘆原英了:「ナンバン」(1941)『舞踊と身体』新宿書房，1986, pp. 309-323.
19) 武智が蘆原との対談において「ナンバの学説っていうのは，昭和三十年ごろわたしが言い出して，今では公認されましたけど…」(蘆原英了・武智鉄二・長嶺ヤス子（対談):踊りと語り「新劇」27巻11号，白水社，1980. 11, p. 83) と発言していることからすれば，蘆原の論稿はナンバの姿勢そのものに関する研究としては，武智のそれよりも早期に世に送り出されていたことがうかがえる。
20) 多田道太郎:『しぐさの日本文化』筑摩書房，1972, p. 161.
21) 多田道太郎: 同上書，pp. 163-164.
22) 多田道太郎: 同上書，p. 164.
23) 高取正男:『日本的思考の原型』講談社，1975, pp. 130-131.
24) 高取正男: 同上書，p. 133
25) 野村雅一:『しぐさの世界』日本放送出版協会，1983, p. 14.
26) 野村雅一:『ボディランゲージを読む』平凡社，1984, p. 30.
27) 野村雅一:『身ぶりとしぐさの人類学』中央公論社，1996, p. 18.
28) 野村雅一:『しぐさの世界』日本出版放送協会，1983, pp. 17-18.
29) 三浦雅士:『身体の零度』講談社，1994, pp. 126-168.
30) 甲野善紀:『武術の新・人間学』PHP研究所，1995/ 養老孟司・甲野善紀:『古武術の発見』光文社，2003など.
31) 斎藤　孝:『身体感覚を取り戻す』日本放送出版協会，2000, pp. 34-50.
32) 野々宮　徹:「ヨーロッパ文化が日本のスポーツ文化に与えた影響—走法や体操法にみられる例を中心として—」『シルクロード・奈良国際シンポジウム記録集 Vol. 3「シルクロードとスポーツ」』シルクロード学研究センター，1997, pp. 97-101.
33) 稲垣正浩:「近代の身体概念—『歩行』運動の分析をとおして」『身体論—スポーツ学的アプローチ』叢文社，2004, pp. 111-259.
34) 河野亮仙:「舞踊と武術—アジアの身体文化」『身ぶりと音楽』東京書籍，1990, p. 141.
また，河野は別著において「なんばは山歩き，ぬかるみ歩きなどの日常生活の動作に還元すべきではないか」(河野亮仙:「舞踊・武術・宗教儀礼 芸能と祭りの身体論へ」『叢書・身体と文化 第1巻 技術としての身体』大修館書店，1999, p. 205) との見解を示している。
35) 中房敏朗: 前掲書，pp. 23-31.
36) 木寺英史:『本当のナンバ　常歩』スキージャーナル，2004.
37) 天野郡壽: ナンバ歩き考「ひすぽ」60号，スポーツ史学会，2005. 3, p. 6.
38) バルザック「歩きかたの理論」山田登世子訳『風俗のパトロジー』新評社，1982, pp. 79-146.
39) 岸野雄三:『体育史』大修館書店，1973, p. 67/ 野村雅一『身ぶりとしぐさの人類学』中央公論社，1996, pp. 13-14.
40) モース「身体技法」有地亨・山口俊夫訳『社会学と人類学Ⅱ』弘文堂，1976, pp. 121-156.
41) 足を引き摺って歩くという形態を表現するうえでは,「すり足」という文言が適当であるように思われる。しかしながら,「すり足」はすでに伝統演劇の基本形を意味する専門用語として認知されている。そのため，以下本研究では，混乱を避けるべく「引き摺り足」という文言を用いて当該の歩行形態を表現する。なお,「すり足」に関する主な論稿には，武智鉄二:「民族主義芸術としての花」『伝統と断絶（新装復刻)』風塵社，1989, pp. 188-231/ 多田道太郎:『しぐさの日本文化』筑摩書房，1972などがある。
42) マクドナルド:「日本回想記」(1923) 富田虎男訳『マクドナルド「日本回想記」インディアンの見た幕末の日本』刀水書房，1979, p. 153.

43) ハイネ:「世界周航日本への旅」(1856) 中井晶夫訳『ハイネ 世界周航日本への旅』雄松堂出版, 1983, p. 140.
44) ギメ:「1876 ボンジュールかながわ」(1878) 青木啓輔訳 『1876 ボンジュールかながわ』有隣堂, 1977, p. 24.
45) マローン:「日本と中国」(1863) 眞田収一郎訳『マローン 日本と中国』雄松堂出版, 2002, p. 49.
46) ロチ:「秋の日本」(1889) 村上菊一郎・吉永清訳『秋の日本』角川書店, 1953, p. 65.
47) 武智鉄二:「演劇伝統論」『定本・武智歌舞伎⑥演劇研究』三一書房, 1981, p. 346.
48) ツュンベリー:「江戸参府随行記」(1793) 高橋文訳『江戸参府随行記』平凡社東洋文庫, 1994, pp. 236-237.
49) スミス:「日本における十週間」(1861) 宮永孝訳『スミス 日本における十週間』雄松堂出版, 2003, p. 98.
50) ロチ:「日記」(1885〜1901) 船岡末利訳『ロチのニッポン日記—お菊さんの奇妙な生活』有隣堂, 1979, p. 185.
51) 時代は下って昭和初期に至ってもサンソム(1928〜36) が「通路を歩くとカタカタという下駄は…」などと認めている (サンソム・大久保美春訳:『東京に暮す』岩波書店, 1994, p. 104)。
52) ハーン・仙北谷晃一訳:「東洋の土を踏んだ日」『小泉八雲作品集 1—日本の印象—』河出書房新社, 1977, p. 18.
53) フロイス:「日欧文化比較」(1585 編集) 岡田章雄訳『アビラ・ヒロン日本王国記 ルイス・フロイス日欧文化比較』岩波書店, 1965, p. 518.
54) 潮田鉄雄:『ものと人間の文化史 8 はきもの』法政大学出版局, 1973, p. 213.
55) 野村雅一:『身ぶりとしぐさの人類学』中央公論社, 1996, p. 13.
56) ハーン・平井呈一訳:「日本の風土」『外国人の見た日本 第三巻 明治』筑摩書房, 1961, p. 29.
57) 野村雅一:『身ぶりとしぐさの人類学』中央公論社, 1996, p. 12.
58) ゴンチャロフ:「フレガート・パルラダ」(1857) 高野明・島田陽訳『ゴンチャローフ日本渡航記』雄松堂出版, 1969, p. 463.
59) マローン: 前掲書, p. 49.
60) バード:「日本紀行」(1880) 楠家重敏・橋本かほる・宮崎路子訳『バード 日本紀行』雄松堂出版, 2002, p. 22.
61) ロチ:「日記」(1885〜1901) 船岡末利訳『ロチの日本日記—お菊さんとの奇妙な生活』有隣堂, 1979, p. 185.
62) ハイネ: 前掲書, p. 139.
63) シュリーマン:「今日の中国と日本」(1867) 藤川徹・伊藤尚武訳『シュリーマン 日本中国旅行記』雄松堂出版, 1982, p. 101.
64) バード: 前掲書, p. 23.
65) ボードヴァン・フォス美弥子訳:『オランダ領事の幕末維新 長崎出島からの手紙』新人物往来社 ,1987, p. 37.
66) バード: 前掲書, p. 22.
67) ハイネ: 前掲書, p. 139.
68) ギメ: 前掲書, p. 24.
69) ロチ:「秋の日本」(1889) 村上菊一郎・吉永清訳『秋の日本』角川書店, 1953, p. 61.
70) ロチ:「日記」(1885〜1901) 船岡末利訳『ロチの日本日記—お菊さんとの奇妙な生活』有隣堂, 1979, p. 185.
71) ハイネ: 前掲書, p. 139.
72) マローン: 前掲書, p. 49.
73) ヴェルナー・金森誠也・安藤勉訳:『エルベ号艦長幕末記』新人物往来社, 1990, p. 73.
74) バード: 前掲書, pp. 22-23.
75) ロチ:「秋の日本」(1889) 村上菊一郎・吉永清訳『秋の日本』角川書店, 1953, p. 65.
76) ハーン・平井呈一訳:「日本の風土」『外国人の見た日本 第三巻 明治』筑摩書房, 1961, p. 29.
77) ブスケ:「日本見聞記」(1877) 野田良之・久野桂一郎訳『ブスケ 日本見聞記 1 フランス人の見た明治初年の日本』みすず書房, 1977, p. 62.
78) マローン: 前掲書, p. 49.
79) カッテンディーケ:「長崎海軍伝習所の日々」水田信利訳『長崎海軍伝習所の日々』平凡社東洋文庫, 1964, p. 75.
80) コバルピアス:「メキシコ天文観測隊日本旅行記」(1876) 大垣貴志郎・坂東省次訳『ディアス・コバルピアス日本旅行記』雄松堂出版, 1983, p. 50.
81) コバルピアス: 同上書, p. 51.
82) バード: 前掲書, p. 23.
83) カヴァリヨン:「254 日世界一周」(1894) 森本英夫訳『モンブンランの日本見聞記—フランス人の幕末明治観』 新人物往来社, 1987, p. 181.
84) ゴンチャロフ: 前掲書, pp. 242-243.
85) ベーコン:「日本の内側」(1894) 久野明子訳『華族女学校教師の見た明治日本の内側』中央公論社, 1994, pp. 203-204.
86) デ・サンデ:「天正遣欧使節記」(1590) 泉井久之助訳『デ・サンデ 天正遣欧使節記』雄松堂出版, 1969, pp. 58-59.

87) 浜田彦蔵:「アメリカ彦蔵自伝」(明治20年代) 山口修・中川努訳『アメリカ彦蔵自伝1』平凡社東洋文庫, 1964, p. 62.
88) フェルディナント:「世界旅行日記」(1895・96) 安藤勉訳『オーストリア皇太子の日本日記—明治二十六年夏の記録—』講談社, 2005, pp. 21-22.
89) 谷釜尋徳: 近世後期における江戸および江戸近郊地の庶民の旅に関する史的研究—紀行文, 旅日記および道中記を手掛りとして—「運動とスポーツの科学」第11巻1号, 日本運動・スポーツ科学学会, 2005. 12, p.9.
90) ツュンベリー: 前掲書, p. 236.
91) ツュンベリー: 同上書, p. 234.
92) ブラック:「ヤング・ジャパン」(1880) ねずまさし・小池晴子訳『ヤング・ジャパン1』平凡社東洋文庫, 1970, p. 143.
93) 小田切毅一も股引を庶民の活動的な行動に適した着衣として位置づけている (小田切毅一:「着物社会が許容するスポーツ行動—葛飾北斎『漫画』をてがかりに—」『体育・スポーツ史研究への問いかけ』清水重勇先生退官記念論集刊行会, 2001, p. 44)。
94) ツュンベリー: 前掲書, p. 237.
95) スミス: 前掲書, p. 98.
96) スエンソン:「江戸幕末滞在記」(1869〜70) 長島要一訳『江戸幕末滞在記』新人物往来社, 1989, p. 79.
97) 平亭銀鶏「江の島まうで浜のさゞ波」(1833) 『道中記集成 第25巻』大空社, 1996, p. 202
98) モース:「日本その日その日」(1917) 石川欣一訳『日本その日その日3』平凡社東洋文庫, 1971, p. 218
99) モース:「日本その日その日」(1917) 石川欣一訳『日本その日その日1』平凡社東洋文庫, 1970, p. 122
100) ボヌタン:「極東」(1887) 森本英夫訳『モンブランの日本見聞記—フランス人の幕末明治観』新人物往来社, 1987, p. 108.
101) カヴァリヨン: 前掲書, p. 180.
102) クロウ:「日本内陸紀行」(1883) 岡田章雄・武田万里子訳『クロウ 日本内陸紀行』雄松堂出版, 1984, p. 15.
103) 武智鉄二:『舞踊の芸』東京書籍, 1985, p. 148.